

平成31年3月1日

学校新聞「玲瓏」

秋田県立本荘高等学校 校長 今井 智幸

青年期の発達課題について

「各ライフステージには、多くの人が直面する発達課題があり、それらに取り組み、乗り越えていくことで、人間は生涯を通して発達する。」

これは、本校の家庭科で使用している教科書「家庭基礎」（開隆堂）の「第1部 人生を見通し、共に生きる 第1章 青年期の自立と家族・家庭」の「1 青年期の自立」の中で記されている文章です。ライフステージとは、人の一生は乳児期、幼児期、児童期、青年期、壮年期、高齢期などに分けられ、それぞれの発達段階のことをいいます。また発達課題とは、人間が健全で幸福な発達をとげるために各発達段階で達成しておかなければならない課題で、次の発達段階にスムーズに移行するために、それぞれの発達段階で習得しておくべき課題とされています。

乳児期の発達課題は、「養育者との応答を通して信頼感を育む。人との交流を通して外界とかかわり始める。」と教科書の図解の中で説明されています。乳児期は、愛情が感じられる養育者とかかわり合いによって、他者への信頼感が育まれる。また、親から得られた安心・安全な感覚があるから、身近なものをなめたりさわったり、あちこち動き回ったりして外界とかかわり始めることができるようになる。これが、乳児期に達成しておくべき課題だということです。

青年期の発達課題は、「アイデンティティを形成し自己の価値観を育む。将来の自立とかかわらせた基礎力を養う。」とあります。将来の自立とかかわらせた基礎力とは、どういことでしょうか。教科書では自立は、生活的、経済的、精神的、社会的、性的の5つで考えられています。確かな学力、豊かな人間性、健康・体力、つまり知・徳・体の「生きる力」と考えることもできます。一方、アイデンティティを形成し自己の価値観を育むとは、どういうことでしょうか。これまでの自分の殻を脱ぎ捨て、自分とは何者かという問いに答えて、新しい自分のアイデンティティを確立することや、新たに自分なりの価値観を育むことが、青年期に課された課題だということです。しかし、葛藤や不安が生じたり、自分がわからなくなったり、将来が不透明に感じられたりする「アイデンティティの危機」に陥ったりするのも青年期の特徴です。

自分は何をめざして生きるのかという、人生の目標や意義を考えること、過去の自分を振り返りながら、未来に向けて生きる自己を築くこと、そして社会の中で自分の果たす役割や活動の場所を見つけ、他者から承認されることなどが必要です。

自分らしい在り方を求め努力をすることによって、青年期のアイデンティティは確立され、次のライフステージに歩き始めることができます。